

---

# 私の好きな人

Sk

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の好きな人

### 【Nコード】

N7071M

### 【作者名】

Sk

### 【あらすじ】

「覚えて…ないの??」  
超短編、少年少女のコメディ恋物語。  
終わり方が悲惨。。

(前書き)

とても書き方の荒いものです。

こゝ、これは…大体2年前くらいに書いたものなので 言い訳

それでも見てやるぞという心の大きさをおもちのかたはどうぞ読んでやって下さい。

私は、未<sup>み</sup>華<sup>か</sup>梨<sup>り</sup>。14歳。バリバリの中学二年生って言いたいけど…  
実は私は9年間病院に住みついでる…（幽霊じゃないけど…  
幼稚園の年長の時に倒れて以来、ずっと病院から出てない。

私の面倒は全部おばあちゃんが見てくれた。  
両親はどうしてるかと言うと…

お母さんは、無理して私を生んで死ぬはめになった…まあ、私のせいで死んだってこと。

お父さんは、お母さんを失ったショックでアルコール依存症になっちゃったみたい。

他人事みたいにいってるけど、実際、私に感覚としては他人以外のなんでもないんだよね。

私の親、おばあちゃんだけだし。

文だけ読んだら、とても不幸な少女って感じだけど、自分ではよくわかんない。わかるとき来るかな？

だって、そんなこと、どうでもよくなるくらいの楽しみがあるから。

それは…

「ケイ！」

私は目の前のふさふさとしている犬に抱きついた。もちろん犬  
OVE だから

そしたら、頭の上の方から、低い声が出た。

「おい…俺よりもケイ優先かよ。」

声の主は…ケイの飼い主の優<sup>ゆう</sup>知<sup>ち</sup>…

ちよび…と怒ってるかな？

「犬に嫉妬シナイ 優知はすぐ妬くよね、ケイ。」

私はそう言っただけでケイの首の下をくすぐった。

ケイは気持ちよさそうにしてる。

「っな／＼そんななんじゃねーよ！！犬触る前に飼い主に許可取れ！！」

優知は怒鳴ったけど、そんな赤面で言われてもね

嫉妬してるってバレバレだってばさ（笑）

「ええ…ケイ先じゃダメ??」

一応、上目遣いしてみた 効果あるかな??

「え！いや、その…」

優知は、言葉を濁して、ほっぺをポリポリとかいた。

「かゝわいい」

優知のほっぺに軽くキスしたら、優知は照れちゃって、真っ赤になっただけ。

「っな…なな…」

にこーってしたら、今度は違う意味で顔を真っ赤にして

「何すんだよッ。」

って怒りだしちゃった…悪ふざけしすぎちゃったかな？

「はいはい、ゴメンね？散歩しよ。」

私がそう言っただけ、

「まあ、許してやってもいいけど…」

って言っただけで手を握ってきた。

それから、二人でいつも通り、ゆっくりと病院の敷地内を散歩した。こんな少しの間が、私の一番の幸せの時間。私にとって優知はすべてだから。おばあちゃんは、確かに優しく面倒見てくれてたけど、彼氏ができたってわかってからお見舞いに来てくれなくなった。

でも、今まで面倒は充分見てもらったし。ちよっぴり寂しいけど、優知がいるから平気。

読んでてわかったとは思っただけ、私と優知は付き合ってるんです

きっかけは…小学6年の時。

私は、中学生になってから個室に移ったからこの頃は今みたいな個室じゃなくて、たくさんの人と一緒だった。

病院に入院して7年。私は12歳だった。

その日、朝からヒマでぼーっと本を読んでいた。

そしたら、急に入口の方が騒がしくなった。

「ちょっと！俺は入院する気はありません！！まだサッカーの試合があるんです！」

男の子の声がして、なんだかもめてるみたいだった。

「はいはい、どうせ一週間は歩けないんだから大人しくしててね。」  
看護婦さんはそう言っつて、車椅子の男の子を私の向かいのベッドまで連れてきた。

その男の子は、一言で言っつてかつこよかった。

サッカーのユニフォームを着ているのに、両足に包帯をぐるぐる巻きにされていて、

一生懸命に看護婦さんに反抗してた。

「変なの。」

くすつて笑っっちゃった。

笑っつたのは久々で、元気な男の子を見てると自分も元気が出る気がした。

男の子は、しぶしぶベッドに移っつてから

「全く……」

とまだ、ぶつくさ文句を言っつていた。

そしたら、ようやく向かいの私に気づいて、

「君、外に出たこと……ないの??」

そう言っつて、キョトンとしてた。

「え〜と、幼稚園以降は……」

そう答えたら、さらに驚いてた。

「なんで!?!なんで!?!」

男の子はさっきまで入院をあんなに嫌がっつたのに、そんな事はそ

つちのけで、私に興味をもった。

「えっと、ずっと入院してて…あの…」

ワクワクと期待してる顔を見ると、おかしくて笑えてきた。

「アハハッ」

私が笑うと不満そうにしたけど、それでも私はおもしろくて笑ってた。

「なんで笑うのさ？」

「おかしいから。」

「どこが？」

それから、仲良くなつて、ケイに会って、初めて触った犬はかわいくて、散歩もするようになって…

で、カレカノまでなぜか発展！！幸せな毎日を送ってます。

でも、時々、すごく怖くなるの。

優知がいなくなったら、私はどうなるの??

考えたくもないけど、時々冷や汗をかくような時があつて。

優知は、私と違って学校に通ってるから…

そんなことを考えると、タイミングよく優知が言った。

「未華梨、今日は勉強しような。」

「ええ、勉強??」

上目づかいは一応試してるけど…どうせだめだろうなあ。

勉強のときだけは、上目遣いもなぐんにもきかないんだよね、優知つて。

「未華梨は学校通ってないんだから。」

私のことを思ってくれてるのはわかるけど、やっぱりちょっとさみしい。学校っていう差があるのって…

「はいはい。」

私たちは、私の病室に向かって方向転換した。

ケイは、途中で優知が小さい子たちに貸して(?)あげてる。

まあ、ようは預けてるってことかな。

「じゃ、この問題といて。」

真剣な優知。かっこいいけど…つまんない。

「はいはい。」

スラスラスラって解ける。なんでだろう…

「おお、正解。オレの教え方がいいからきつところになったんだな。」

自慢げに優知は言うけどわたしは即座に否定する。

「違う！」

一瞬、優知は驚いて固まって

「はいはい、未華梨の頭がいいのな…」

それで深くうなずくの。

「そうそう。」

「…納得すんな。」

優知は不満げに言うけど

「正しいですよ。」

自信満々に私が言うと、引き下がるの。

「優知の心情」あゝあ、毎日勉強とか散歩とか… ホントにおれたちカップルなのか？むしろ他人から見ると、仲のいい兄弟って感じだよなあ。別に、キスとかしたいってわけじゃないけどノノノ。いっつもなんかケイの方が優先されてるし。結局勉強やってもスラスラ解かれるから一緒にいる意味あんのかわかんねーし。不満そうだし。

「優知、もういいでしょ？時間結構過ぎたよ??？」

夕食の時間が近づいてくる。

「あ？ああ、そうだな。じゃあ、俺もどるな。」

そっけないなあ。

「うん、じゃ、またね。」

手を振って、それから優知が病室から出ていってから、小さくため息をついた。

あゝ、もっとカップルっぽく…したいよお。散歩で満足はしてるけ



ど、それでも普通にデートとかはしてみたい…別にキスとかがしたいわけじゃないけどさ。勉強とかばかり。

「次の日」

また今日も散歩。今日は優知も学校が休みだった。でも、残念ながら雨だから室内デート。

「今日は中かあ。」

がつくりと肩を落とす私に、優知はちょっとムツとして

「不満？ケイいないし。」

なんか怒ってる？っぽかった。

「別に。そんなこと全然ないけど…」

そう言ったのに、それでも優知はなにか怒ってるみたい。

「そうか？」

「そうだよ？だって優知がいるんだもん。」

いつもなら、優知は真っ赤になるはずなのに…

「本当にそうか??」

まだ、信用ないみたい。

「そんなに私信じられない？」

ヤバ！反抗的に言っちゃった！！

「いや…ゴメン…なんか俺、今日変…」

あゝ、そう言ってるけど…

すねちゃったみたい。

そっぽ向いてるし、左手ポケットに突っ込んだじゃったし…

手、繋ぎたいのになあ。

…しばらく、無言で散歩した。

優知はときどき、フラフラと私を置いて行ったりして…

一緒に歩きたくないのかなあ。

無言って空気悪いなあ。

「ねえ、優知。」

優知、無視してる…

「優知ってばさ。目くらい合わせたっていいじゃん！なんで無視するのさ。」

もく、怒った！

「無視してんじゃねーの。」

優知がこつちを向いた。

顔が赤くてぽーっとしてる感じ。

なんか…ちよつと、変???

「そーじゃ、なくてさあ。」

優知が私の目をやっと思って…固まった??

と思ったら

バタツ

「きゃっ！」

優知が私を押し倒すかたちで倒れてきた。

思わず目を閉じたけど…

ん???

なんか…

唇に不思議な感触が…

パチッ

「！」

どあつぷの優知の顔が目の前に…

つてか、寝てる???

ゆっくりと優知を両手で起こすと

おでこに手をあててみた。

息が少し荒々しくて、顔が真っ赤な優知は…かなりの高熱だった。

「優知…あの…起きて??熱があるのはわかるけど…どけられないんだけど…」

ないんだけど…」

優知の上半身は起こしたものの、優知をどかすのはさすがに、普段から運動をしてない私の力では無理だった。

そこに、タイミングよく…なのか、または、悪くなのか、看護婦さんがきた。

「えっと…大丈夫??未華梨ちゃん。」

優知が寝てるのがわかったみたいで、妙な誤解はされなそうですんだ。  
「はい…でも、なんか熱あるし…起きてくれないし…優知をよかしてももらえます?」

困ったなあ。風邪なら風邪って言ってよ。

看護師さんが、なにかに納得していた。

「ああ、だから珍しく手を繋いでなかったのね。」

「え?」

「だっていつも手を繋いでいるのに、ケンカでもしたのかと思ったんだけど、優知くんって優しいものね。風邪移さないようにって、気を使ってたのね。」

看護師さんはニコニコしてた。

そうなのかなあ。なんか、悪いことしちゃったかも。

「でも、そーならそーと言ってくれれば、無理して散歩なんてしなかったのに。」

私が口をとがらせたら、看護師さんはニコニコしたまま

「きつと、心配かけたくなかったのよ。それに、今は未華梨ちゃん個室だし。無理して他の部屋にいつまでもいてほしくなかったんじゃない?」

そう言っただけど、それでも

「でも、そんなこと言ったら散歩すらできないじゃないですか。散歩できるんだから、そんなの気にしなくて…」

って私は思っただけど。

「まー、本人に聞かなくちゃ実際のところはよく分からないわよ?」  
看護師さんは説明をあきらめて、優知を病室に連れて行った。

私は、そろそろ時間も時間だったし、とりあえず、自分の病室に戻った。

それから、ふと思い出した唇に残る感触…

「初キスかあ。こんなんかな?」

でも…熱で倒れてきただけだし…

優知寝てたし…  
なんかなあ。

「またまた次の日」

「優知、風はもう平気みたいだね。」

私は優知の病室にいた。

優知はこの日、熱も下がったけど念のためってことで学校は休んだ。

「ああ、もうすっかり…」

優知は笑顔でそう言った。

気分悪くもなさそうだし、顔色もいいし、ほっとした。

「でも、嬉しいかも。」

へへっと私がニコニコしてるのを優知は少し不気味がりながら

「何が？」

って恐る恐る聞いてきた。

失礼な奴。

「だって、今日は学校休んだから、この前の休日の分、ずっと一緒にいられるじゃん。」

そう言ったら、優知はちょっと嬉しそうに、顔を赤らめた。

「そうか…」

「うん！とところで優知、この前の…だけど…どうだった？？」

私が話を変えると、優知はキョトンとした。

「この前の？」

え???

「いや、だから、優知が倒れてきて…」

私としては、キスはわざとだったようには見えなかったけど、どうなのかなあって思ったから、そのちょっと聞いてみようかな？って思っただけで…深い意味もないし…だったんだけど…

「は？何の話??？」

まちでこいつはとぼけてんのか???

「覚えて…ないの??？」

って聞いたたら

「ああ、何の話??」

ってあまりに純粹無垢な笑顔で言うから、腹が立ってきた…

「もー!!最っ低!!」

私は手に持ってたチョコレートを優知に投げつけた。

「痛っ!何すんだよ!」

優知はまだ意味わかんないみたいで怒ったけど、

「チョコレート食べたら、糖分とれてそのバカも治るんじゃない!」  
「?」

そう吐き捨てて、優知の部屋を出た。

「何アイツ!最っ低!覚えてないとか!私の初返せ!!」

って叫びながら歩いてたら

ドンッ

前を見てなかったから、誰かとぶつかっちゃった。

「すみませんっ」

ってあやまって顔を見たら

超美形 優知なんかより全然かっこいい。

「イエ、大丈夫デスカ?」

青い瞳に髪は黒。片言だしハーフ??

って思ってたならその外人?くんが私の顔をくいつと自分の方に向けて

「スミマセンデシタ。」

って言っけキスした〜!?

「!??」

驚いたところで、ちょうどよく優知が私を追いかけてきた。

「未華梨??」

キスしてる外人とされてる私を見て、優知はとりあえず、近づいてきた。

くいつ

「ゆ…優知」

優知は外人クンを睨むと

「コレ、俺の彼女なんで。」

って言った。少し、惚れ直しちゃった…かも

「って！違う違う！！優知これは、なんでもないの！」

そう言ったら、優知はあからさまに怒ってて

「なんでもない？どこが？」

って怒ってて聞く耳持っていない…。ど…しよ…。

顔が！怖いっ！怒ってる…。

そしたら

「イエ、僕が前方不注意デソノ子ニブツカッテシマッタノデ、オワ  
ビヲシテイタンデスヨ。」

と丁寧に、説明してくれた。

それで、ちょっとは納得したみたいだけど、まだ怒ってて

「それはご丁寧にどうも。でも、外国風のお詫びは結構です！！行  
くぞ。」

そう言うのと、優知は私を引っ張って自分の病室に戻った。

「ゆ…優知…」

優知は、自分のベッドに座った。

「はあ。未華梨は、なんで隙がありすぎるかな。」

なんか、今までに見た事ないちょっと大人な優知だった。

「あの…」

私は何を言えればいいのか、わからなくてうろたえていた。

「こっち来て。」

優知はそう言った。

私は、ゆっくりと優知に近づいて行った。

優知はぐいっと私の腕を引っ張って、キスをした。

「…消毒。」

キスして一言、そう言った。

そっちからしたくせに、顔を赤らめてるから、つられて私も赤面にな  
った。

「え〜つと、ごめん。」

「で、なんで勝手にキレてチヨコぶつけて出て行ったわけ??」  
怒ってた。そりゃねえ。

いきなり彼女がキレて追いかけたら外人とキスしてた…なんて…

「だって、覚えてないんだもん。」

「何が?」

「優知が、昨日熱で倒れてきて初キスしちゃったこと!!」

大声で言ったけど、それなりに恥ずかしい。

っていうか、こんなこと彼女に言わせるなんて、やっぱり最低。

でも、外人とキスした私はもつと最低??

「はあ!??」

「やっぱり覚えてないんだ。」

優知の本気で驚いてる様子で、すごくがっかり…

「それは、ごめん…」

「ううん…いいよ。部屋戻る。」

私はそう言って部屋に帰ることにした。

部屋に戻る途中、っていうか部屋のドアを開けようとしたとき、外人の声があった。

振り返ると、

「今日からここがあなたの部屋ですから。」

「ハイ。アリガトウゴザイマス。」

看護婦さんに部屋を紹介されてるよう  
でどうやら…

私の隣の部屋になってしまったらしい。

私は部屋に入って、ベッドにぐったり倒れた。

あんな優知（外人とキスしてる未華梨を見てキレた優知）初めてみたけど、これからもつと見ることになるかも…

そう思うと気が重い…

嫉妬してくれるのは嬉しいけど、毎回キレられたらそれは大変だろ  
うし。

これからどうなるんだろうなあ。

平気でキスをする外人クンが隣で、優知はまた怒るかもしれない。

また何かあってキスされてしまうかも…

そんな事を考えながら、なんとなく眠気が襲ってきたので

…私は寝た。

くおしまいく



(後書き)

何て終わり方なんだ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!  
改稿しろよ!!!!!!!!!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7071m/>

---

私の好きな人

2010年12月31日04時10分発行